大成山普門院と牧志摩守、小栗上野介

大成山普門院

大成山普門院は、室町時代前期の応永 33 年(1426)創建の禅寺で、開山は『本朝高僧伝』にも名が記されている月江正文(げっこうしょうぶん)、開基は金子駿河守である。

寺伝に、「月江和尚が武蔵一宮氷川神社で終夜祈願されていた時のこと、一人の老翁が現れ、和尚は道徳がとても優れている、必ず仏法の霊験が現れるといわれた。一方神主にも、拝殿に高僧がいる。凡僧ではない。西に観音堂がある。必ずこの地に留めよといわれ、いい終わると消えた。そこで正月三日に礼式を整え大成村へ月江和尚を案内し、領主金子駿河守にこのことを伝えた。領主は帰依し、観音堂の地に陣屋屋敷を添えて草庵を作り、観音を本尊に、寺号を普門院とした。領主金子駿河守大成は法号を幻公庵主といった。」とある。

金子駿河守は、武蔵七党の一つ村山党の一族で、入間郡金子郷（現入間市）を本拠とし、源頼朝に従って活躍した金子家忠の流れを汲む者と思われるが、詳細は不明である。

『新編武蔵風土記稿』に、「開基金子駿河守墓　文字漫滅して詳ならず。永享の二字わづかに読べし」とあり、また、「永享七年(1435)八月二十四日卒と寺記に載たり」とある。

普門院の所在地について『新編武蔵風土記稿』は、「當境内はかの駿河守の城跡なりともいへり、今も東北の方に、から堀なぞ残り、住居の跡なる事知らる」とある。『埼玉の館城跡』（埼玉県教育委員会編）には、「正方形、30,000 ㎡（9,000 坪)。館跡は大成中学校から普門院にかけての地域を占める。」とある。大成館跡は、さいたま市指定文化財（史跡）

旗本　牧氏　　□で囲った人は普門院に墓石がある。

①正勝　尾張国愛知郡長久手村（長久手市）に住み、信長に仕えた。

②長正　家康に仕えた。三方ヶ原の戦いで奮戦

③長勝　家康に仕え、普請奉行として名古屋城築城
元和 8 年(1622)12 月死す。大成村普門院に葬られた。

④長重　秀忠、家光に仕え、与野町を含む 1,500 石拝領
万治 2 年(1659) 9 月死す。普門院に葬られた。

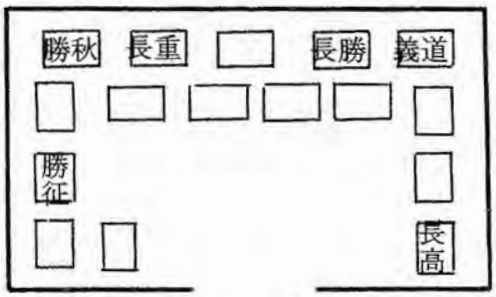
⑤勝秋　1,200 石を知行し、300 石を弟⑴長高に分けた。
寛文 11 年(1671)7 月死す。普門院に葬られた。

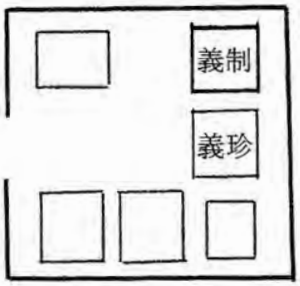
⑥勝征(かつゆき)　貞享 5 年(1688)6 月死す。普門院に葬られた。
嗣なく家断絶、領地収公

⑴長高　父長重の遺跡のうち与野町 209 石 5 升を含む
300 石を賜った。その後廩米(りんまい)（扶持米）400 俵加増
貞享 4 年(1687)仙洞御所（上皇御所）附となり、
丹波国氷上郡（兵庫県丹波市）の内に 500 石加増
元禄 8 年(1695)9 月晦日死す。普門院に葬られた。

⑵長富　廩米を改められ、400 石を賜る。都合 1,200 石

牧氏墓地（普門院）





享保13年(1728)8月20日死す。四谷龍昌寺に葬られた。代々の葬地とした。

(3)義陳(よしのぶ)　安永7年(1778)4月死す。龍昌寺に葬られた。

(4)長賢(ながかた)　文化4年(1807)5月死す。龍昌寺に葬られた。

(5)義珍(よしたか)　文化10年(1813)4月目付、文政2年(1819)12月京都町奉行

文政8年(1825)6月田安家家老、天保8年(1837)12月留守居役

弘化2年(1845)11月死す。龍昌寺に葬られた。その後普門院に改葬

牧志摩守義制(よしのり)

(6)義制　享和元年(1801)旗本堀利哲の子として生まれ、文政5年(1822)京都町奉行牧丹波守義珍の婿養子となった。天保4年(1833)、従五位下志摩守に叙任され、先手弓頭、火附盗賊改加役、小普請奉行を経て、嘉永3年(1850)長崎奉行に任ぜられた。

牧志摩守義制の長崎奉行としての業績は、ジョン万次郎の取調べとオランダ商館長ドンケル・クルチュウスとの交渉であろう。

ジョン万次郎は、天保12年(1841)乗船していた漁船が漂流、アメリカ捕鯨船に救助されてアメリカに渡った。航海術、測量術等を学び、嘉永4年(1851)アメリカ商船で琉球に上陸、捕らえられ薩摩を経て長崎に送られてきた。牧志摩守自ら取調べを行い、釈放して土佐へ帰国させた。その後牧志摩守の推薦により老中阿部正弘によって江戸へ召出され、江川太郎左衛門家に寄宿。大鳥圭介、榎本武揚、福沢諭吉、西周等多くの者が訪れ万次郎から海外事情や英語を学んだ。

嘉永5年(1852)オランダ商館長としてドンケル・クルチュウスが着任した。クルチウスは特別に東インド総督の長崎奉行宛信書を持参してきた。当時信書は受け取らないことになっていたが、老中阿部正弘と相談し受け取った。信書にはアメリカ合衆国大統領が軍艦を派遣して通商要求を行うこと、アメリカ合衆国はヨーロッパ最強の国々と比肩すべき力を持っていること、日本は用心第一であるべきこと、日本と対策を協議したいことなどが記載されていた。すぐに翻訳し阿部正弘に送付、クルチュウスには協議の内容を打診した。結局任期満了となり協議には至らなかったが、ペリー来航はこうして事前に幕府首脳に伝えられた。

牧志摩守は嘉永6年(1853)西丸留守居に任じられたが、同年8月病死。53歳であった。龍昌寺に葬られたが、その後普門院に改葬

(7)義道　嘉永6年(1853) 11月23日家督相続

慶応元年(1865)11月7日禁裏附、12月7日従五位下相模守

墓誌に、「君感じて奮い立ち、領地丹波からの500俵を供御に充てるなど忠義を尽す」

慶応2年(1866)12月25日孝明天皇崩御、墓誌に、「君哀しみ嘆きて已まず」とある。

慶応3年(1867)4月23日病気に付き御役御免　5月14日江戸に帰った。

墓誌に、「悲しみのあまり、ついに天下の事を為すことができず、辞職を願い、帰り、1年を越えて外出せず」とある。

維新後江戸屋敷返上、丹波国氷上郡小倉村に居住、明治12年(1879)与野町に移住

明治13年(1880)2月20日病死、53歳　普門院に葬られた。

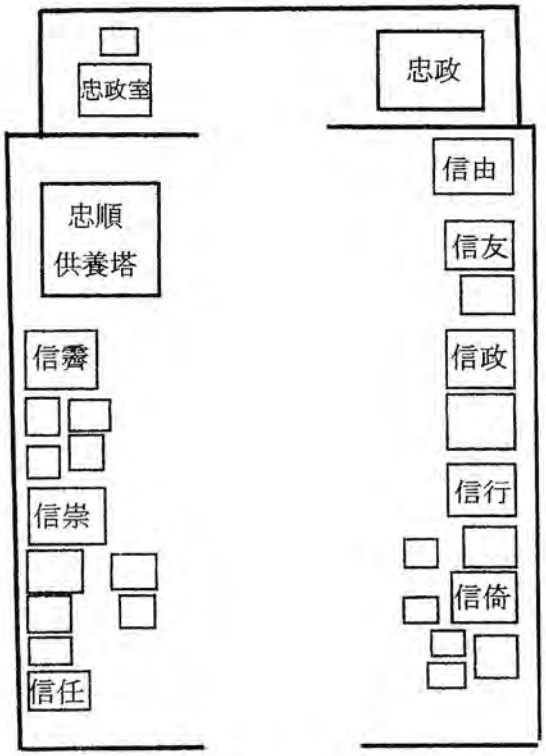
旗本　小栗氏　　□で囲った人は普門院に墓石がある。

小栗氏墓地はさいたま市指定文化財（史跡）

④ 忠政（ただまさ）　清和源氏松平氏一族という。

天文24年(1555)三河国生まれ、家康に仕えた。
小栗家では忠政を４代としている。
元亀元年(1570)近江姉川の戦いで、敵が家康近くに攻めてきたのを見て、傍にあった家康の「信国の槍」を取って渡り合った。人々馳せよってその敵を討ち取った。家康は、忠政が若年なのに心きいた働きをした、一番槍にも等しいと感心しその槍を忠政に与えた。16歳
その後も随一の働きをしたので、名を又一（また一番）とするようにいわれた。
上野邑楽、多胡、武蔵足立の３郡及び下総矢作領の内に2,550石の采地を賜った。
元和２年(1616)９月死亡　大成村普門院に葬られた。

小栗氏墓地（普門院）



⑤政信（まさのぶ）　忠政長男　父の遺跡のうち2,000石知行。のち500石加増され、2,500石を知行
明暦４年(1658)１月19日死亡　77歳　牛込保善寺に葬られ、後代々の葬地とした。
⑥政重（まさしげ）　⑦信盈（のぶみつ）　⑧喜政（よしまさ）　⑨信顕（のぶあき）　⑩忠顕（ただあき）　⑪忠清（ただきよ）　⑫忠高（ただたか）　⑬忠順（ただまさ）（後述）

(1)信由（のぶよし）　忠政二男　家康、のち秀忠に仕えた。
元和２年（1616）父の采地武蔵国足立郡の内550石（大成村）を与えられた。28歳
寛永10年（1633）２月７日上総国長柄郡の内に200石を与えられ都合750石を知行
寛文元年（1661）６月６日死亡　73歳　普門院に葬られ、後代々の葬地とした。
(2)信政　(3)信行　(4)信倚（のぶより）　(5)信霽（のぶはる）　(6)信崇（のぶたか）　(7)信厚　(8)信任　(9)信将

信友（のぶとも）　忠政三男　秀忠に仕え、大坂冬の陣、夏の陣で活躍
下総国葛飾・千葉２郡の内に530石を知行。のち廩米（りんまい）200俵加増された。
延宝９年（1681）６月８日死亡　87歳　大成村普門院に葬られた。
信友系は、信友―信親―信真―信周―信寿―信陽と続き、葬地は麹町福寿院

小栗上野介忠順（ただまさ）

⑬忠順　安政2年(1855)10月22日に家督を継いだ。29歳

安政6年(1859)9月、目付外国掛となり、日米修好通商条約批准書交換のため遣米を命じられた。正使新見豊前守正興、副使村垣淡路守範正、監察小栗豊後守忠順

万延元年(1860)4月3日ワシントンで批准書交換　34歳

○忠順は、アメリカで見聞した事柄に驚愕、帰国後勘定奉行となり財政再建に取り組む一方、陸軍奉行並、軍艦奉行並等に選任され、産業・軍事等の近代化に奔走した。しかし、しばしば罷免され、また選任されている。これは、過激な言動によって幕閣と衝突したが、幕府にとって余人に代え難い人材であったからであろう。

この間豊後守から上野介に遷任されている。

○忠順は、フランスとの提携により、歩騎砲三兵編成、青銅製ナポレオン砲鋳造、鉄製大砲製造のための反射炉建設、仏語伝習所設置、横浜製鉄所・横須賀製鉄所建設等を矢継ぎ早に行った。特に横須賀製鉄所はフランス人技師ヴェルニーを招聘、ツーロン製鉄所をモデルに建設を行った。横須賀製鉄所はその後新政府に引き継がれ、横須賀造船所となった。この横須賀製鉄所こそ日本近代工業の出発点といえる。

明治45年(1912)7月、東郷平八郎は自宅に忠順の遺族を招き、「日本海海戦の勝利は横須賀造船所のおかげ」と礼を述べたという。

○慶応4年(1868)1月、江戸に戻った徳川慶喜に対し、忠順は強硬に主戦論を主張、このため1月15日御役御免となった。忠順は知行地上州権田村への隠棲を決意し、2月28江戸出発、桶川、深谷、高崎泊、3月1日権田村東善寺着　仮住まい。

○4月22日東山道総督府から、高崎藩主・安中藩主・吉井藩主に対し忠順追捕令が出され、閏4月6日（西暦1968年5月27日）に逮捕され烏川のほとりで斬刑に処せられた。享年42歳。上野国群馬郡権田村東善寺に葬られた。

◎忠順は、忠政を小栗家始祖として崇敬しており、忠政夫妻の眠る大成山普門院に特別な親しみと信頼感を持っていた。身の危険を感じてか、1月19日普門院に対し、忠政とその夫人の永代供養料として５０両を納め、家宝である家康から拝領した信国の槍、具足と、忠政の画像を預けたのである。2月28日、権田村への途次、普門院に立ち寄り、最後の別れを告げている。

○普門院四十二世阿部道山氏は小栗上野介復権に並々ならぬ情熱と努力を傾けられた。昭和9年(1934)春彼岸に、忠順娘国子と結婚し小栗姓を継いだ貞雄氏が、普門院に小栗上野介供養塔を建立された。同年8月に普門院に徳川家達題字「小栗上野介招魂碑」が建てられ、黒井海軍大将、横須賀海軍工廠長村田海軍中将、海軍大臣代理山本海軍中将らが出席して除幕式が行われた。碑の撰文は、忠順の妻道子の妹はつ子を母に持つ国際法学者蜷川新博士である。その後、錨と浮標水雷が海軍省から、青銅大砲が横須賀海軍工廠から寄贈された。これらは何れも現在普門院に残されている。

また、自ら『海軍の先駆者　小栗上野介』を著された。

平成30年8月　　発行　大成山普門院　四十四世　阿部道彦